



聖德太子御一生記繪抄
上



平 かん びん 入



けいしきの 聖徳太子御誕生より御入滅まで御一代の
佛は奥志のま守を大連との軍務をもちあむぐの事
不思議を成したる諸事ありし事御若くは
御誕生の事御入滅の事御一代の事

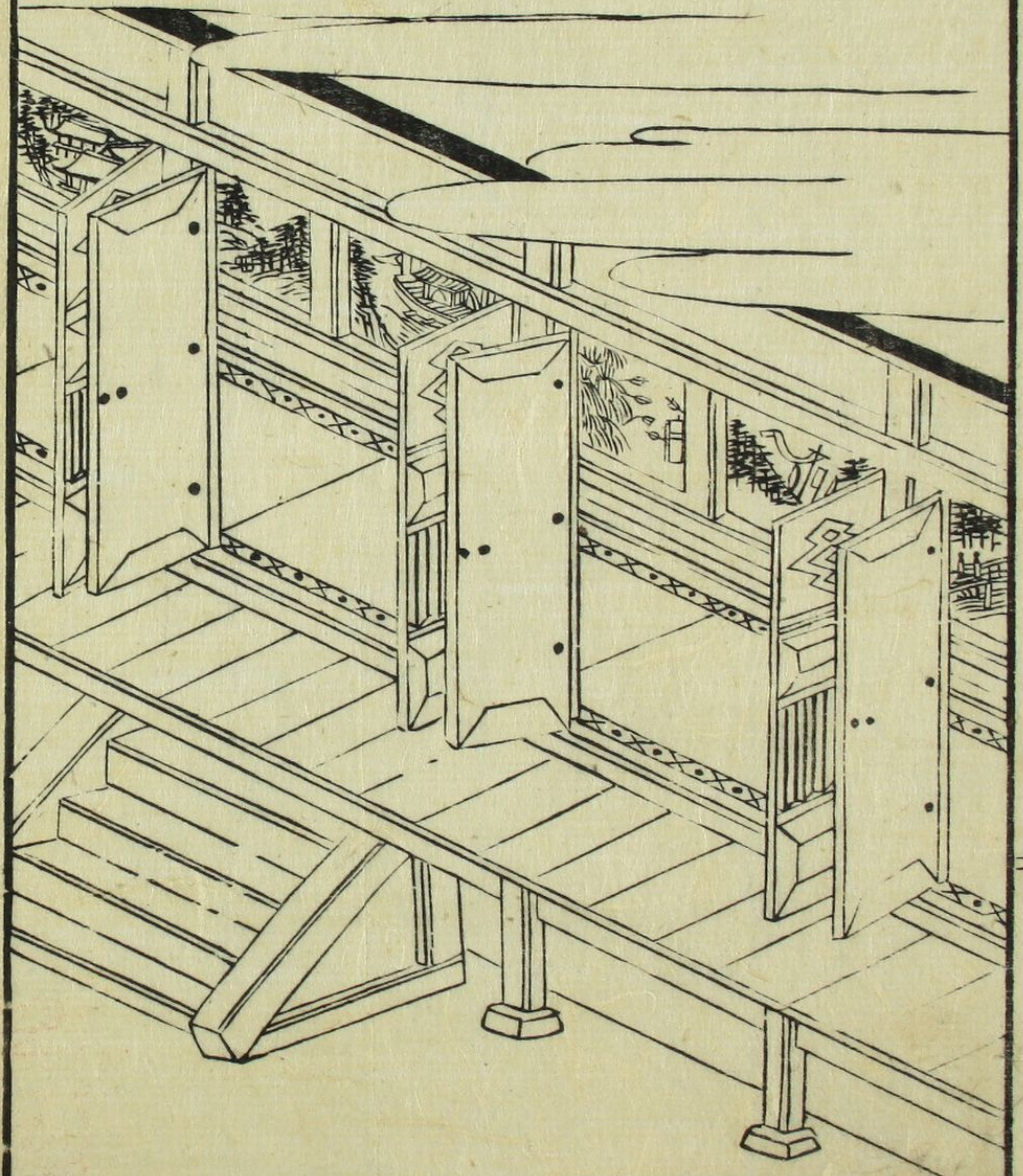
聖徳太子御生記繪抄 全部 三冊

白王都書林

福井正寶堂



聖德太子御一生記繪抄上



聖德太子御一生記繪抄上

御懷胎

人皇三十代欽明天皇卅二年春正月元日此夜才
 四の皇子橘乃豊日尊此后妃間人亮太部の皇
 女此御養ふ金毛の僧立てのこまはく吾救世の
 願有り願くは志はくく后乃まろふ病うんせ
 妃問たまはく是冬誰人そやと憐のれこまはく
 吾を救世れ菩薩あり家ハ西方ありと妃まろ

聖德太子御一生記繪抄上

のまはくあがほふ垢穢あり何ぞ貴人を宿し
もんと煙のたこまはく吾垢穢と厭は唯のそむ
く、歎く人間尔感せん妃のまはく尤之右之
命尔随はん僧歡喜の色をあら躍て口中尔
飛入ふと見あふて御夢活ても喉の中ものを
のまはく如し妃大き奇ごとし此よしと皇子小
告ふ皇子れのまはく汝が誕所あるる聖人
あらんと是より後八月を経て活はるの中ふ云

のま御起耳外不聞えり皇子と始めを大
尔奇異乃思ひをあらふとあり

御誕生

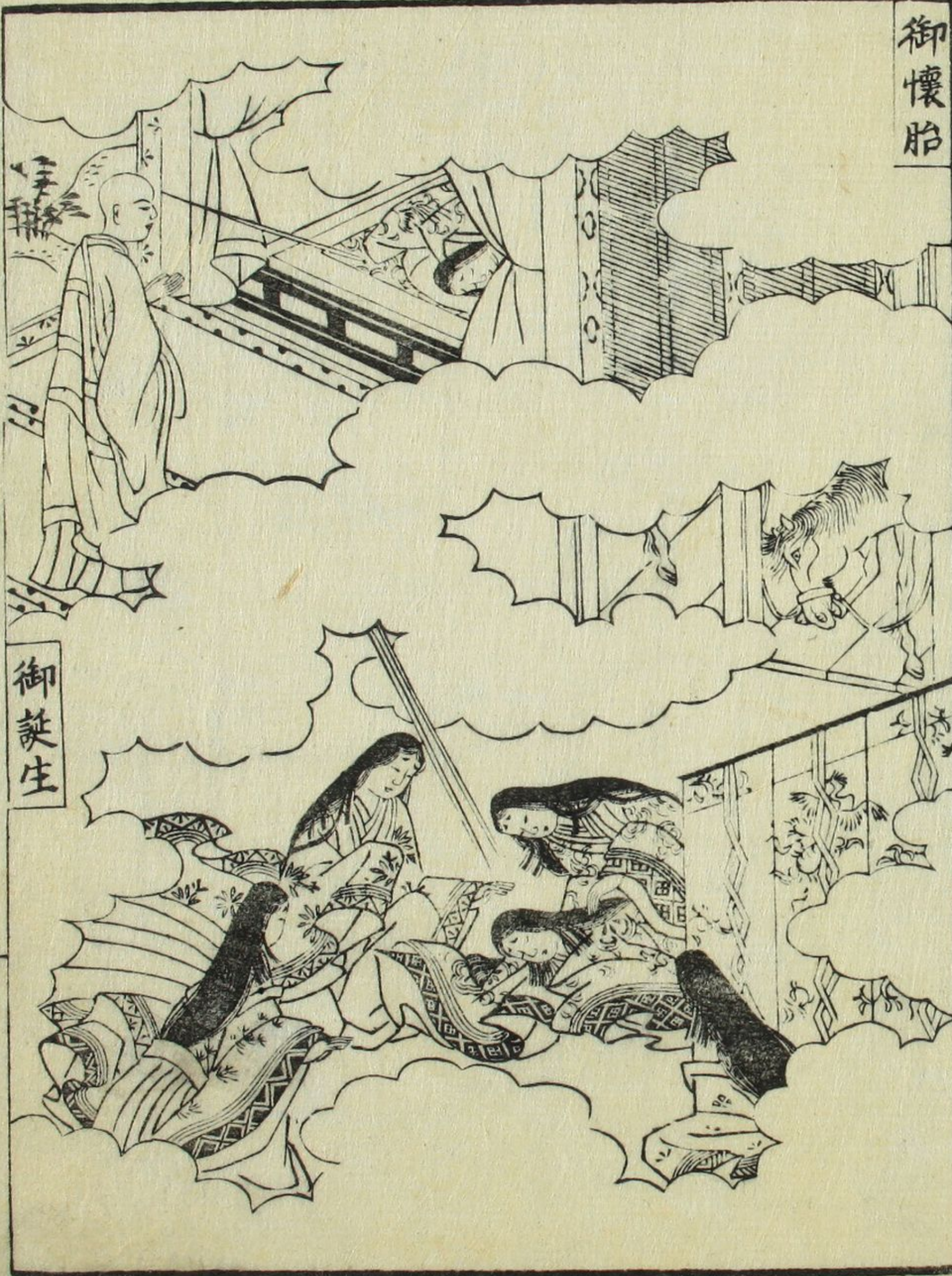
敏達天皇元年正月元日右妃第中を巡りま
尔廐の下ふりて見え御産阿せぬ女孺ふ
と詠ひて抱きをりいそぎ御寢殿へ入室をふ
尔聊も滞恙なく御安宿阿せぬ皇子
を始めを侍従乃西くおと詠き集會をふ

忽西方より赤黄の光り来りて御殿内照耀
たらしりまのり 赤くかり 照る
 く事良久く止ざりて光り

天皇抱太子

天皇御産のよしを聞しめし御駕を命じ
ごきん 聞き 命じ
 豊日此宮へ入御ある時尔まの光り御殿を
とよひ 宮へ 入り 御あり 時 爾まの 光り 御殿を
 照耀と天皇奇異に御感ありて群臣亦勅
照耀と 天皇 奇異に 御感ありて 群臣亦 勅
 してのたまはく此兒ハ後かろく世に異る事
してのたまはく 此兒ハ 後かろく 世に 異る 事
 阿とんと即命じて大湯坐若湯坐を定め

御懐胎



御誕生

桃花之御拵



天白王槍子



出佛舍利

諸王子御聞



沐浴^{そくよく}ありしめゆひ^{ゆひ}之後^{のち}天皇^{てんかう}祿^{ろく}を以^{もつ}て受^{うけ}て
 抱^{かか}きお小^こ次^{つぎ}尔^{のち}皇后^{こうごう}次^{つぎ}尔^{のち}御^み父^{ちち}皇子^{こうし}次^{つぎ}尔^{のち}御^み母^{はは}妃^ひ
 の御^み懷^かを披^ひて抱^{かか}きお小^こ尔^{のち}太子^{たいし}此^{こゝ}御^み身^み香^か一^{いつ}き
 奉^{ほう}云^いんか^{のち}さあ^{のち}一^{いつ}之後^{のち}三日^{さんじつ}此^{こゝ}夕^{ゆふ}天皇^{てんかう}御^み宴^{えん}を
 設^まけ^{のち}群^{ぐん}臣^{しん}亦^{また}賜^{たま}物^{もの}あり七日^{しちじつ}乃^{すなは}夕^{ゆふ}八^{はち}皇后^{こうごう}御^み宴^{えん}
 を設^まけ^{のち}後^{のち}宮^{みや}の官^{くわん}女^{によ}亦^{また}賜^{たま}物^{もの}あり大臣^{だいじん}以^{もつ}て下^{くだ}り乃^{すなは}
 人^{ひと}も饌^{せん}を獻^{けん}して御^み養^{やう}産^{さん}を祝^{いわ}ひ奉^{ほう}りぬ
 又^{また}大臣^{だいじん}大^{だい}連^{れん}等^らの女^{によ}月^{つき}益^{えき}姫^{ひめ}日^ひ益^{えき}姫^{ひめ}玉^{たま}照^{てう}姫^{ひめ}の

三人命めいして太子たいしに御おん妹めい母はは亦また定めぬ事こと夏なつ
四月しがつ亦またあり太子たいし能よく云いふの事こと亦またひ能よく物もの能よく
御おん妹めい母ははの事こと能よく知しる事こと亦またひ能よく物もの能よく
泣なく事こと亦またあり事こと亦またあり

出南無佛舍利

太子御誕生より右に淨土を推せぬ事
御二氣のまゝ二月十日に平旦亦自ら東方亦むり
ハセのひ合掌一南無佛と唱へぬ事亦御堂

の中より佛舍利出現一ゆふ事あり

柞州南無佛の舍利と申ハ太子御過去世
天竺小釋尊御在世の御時阿踰鞞國波
斯匿王乃御娘之降誕一勝鬘曼夫人
と號し亦も容顏端嚴聰慧明敏亦ま
しく亦も一乘甚妙の理を證し佛乃御
所亦おいて御後願ありく勝鬘曼經を講
説し亦も其後釋尊涅槃入を亦も梅

檀だんの柴しばを積つ火葬くわさうしまる其かん寒さみ灰こ乃もト
小こ三斛さんかく六斗りくとうの佛舍利ぶつせりを留とどめめるる時とき令を
彼舍利かのせりを分ぶん散さんあらすす波斯はし匿に五ご八はつ如に來き
の御眼晴ごがんせい乃を舍利せりを得とめめるる以も乃を諸しよ姫ぎ勝しやう賢けん受じゆ受じゆ
人ひと亦また與よへへるる夫ぶ人にん佛舍利ぶつせりを深ふかく恭こう敬けいす
重じゆう此こ余あま里り御ご後ご身みん大たい唐たうあらもも亦また度たびまで
轉てん化げししるる一いつもも一いつままもも彼佛舍利かのぶつせりを失うしなひひた
ままるる乃の終つひ小こ南なん岳かく惠ゑ思し禅ぜん師し等とうりり一いつ日にち
斯この日ぢ

域いき小こ神魂しんこんを遷うつ移りのの時とき也なり彼佛舍利かのぶつせりを拵はらへり
同どう人にんの皇こう女によ乃の口くち中ちゆう小こ飛と入いりり用よう明めい天てん皇こう比ひ
太子たいしと御誕生ごたんじゆうままるる一いつまま世せ皇こう純じゆん乃の右みぎのの手て
と握にぎり滑ろ乳にゅうのの下した小こ着ちゃくききせせるる乃の妹いまい母はは達たつ懐くわい
みみままるるととりり乃の御出胎ごしゅたい乃の乃の時とき也なり皇こう音おん異い乃の
御瑞相ごずいさう多た多たけけ多た多たハハ定さだててしし急きゆうああるるととりり乃の
果はるる乃の御二ごに茶ちや比ひ云い南なん無む佛ぶつと唱なまへり彼佛舍かのぶつせ
利りを出しぬぬ乃の小こ南なん無む佛ぶつ乃の舍利せりと號ごうすす乃の

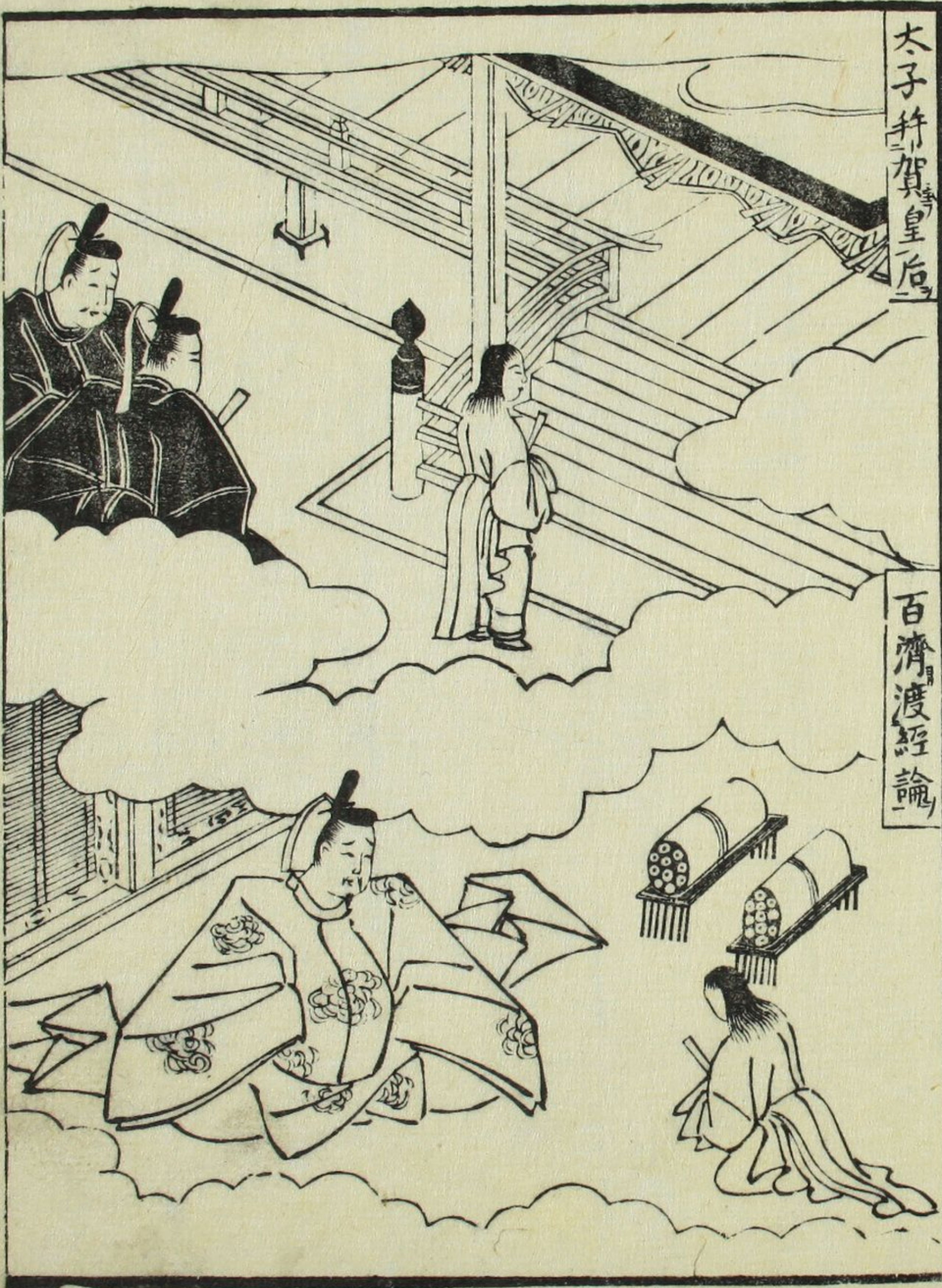
作佛舍利そくとハ如来にょらいの生身なまみ乃遺骨ゆいこつなり世よ
 小あまこあまよりより号なづき物ものあらんや就中すなはち南無なむ
 佛乃舍利ほとけハ如来にょらいの御眼ごがん眼がん此舍利こゝのしゑりあり号なづ
 き仲なかつの最大さいだい至尊さいそんなれハ太子たうじ此御前身ごぜんみ
 勝かた受う丈人ぢやうじんきりり一時いつじよりより以来いらい御七生ごしちう乃同なりどう
 生々なまなま世々よよ放はなちたまりたまりたまり未代みだい乃衆生しゆじやう御化ごけ益やく
 の為ため我寺わがでら小残こざん一ひと金堂きんどう内うち不安ふあん並なら一ひと松まつ
 こまこま小こよよ河か々々今いまももままれれああららりり是これををああみ

日ひく小頂こてい戴たいすす事こと偏ひん小聖徳せうとく法皇ほふこう此大だい
 悲ひ尔に何なにぞぞ守まもらんらんハ未世みよのの系けい等とう如にきき何なにぞぞ佛縁ぶつえん
 を極うごくんん後ご小厚恩こうおんと謝しゃ一ひとちちももんんととすす家け
 小度こどなくなく唯ただ感かん流りゅう小こいいせせぬぬののここ

桃花御たうかのぎよ庭にわ

去三月こぞ三月桃花たうかのの旦あした御父母ごふぼ法ほふもも太子たうじをを率ひきひひ
 後園ごえん尔に持もびび由よし小御父こみちふち太子たうじ小同こどうひひたまたまハハくく
 吾兒わがこ何なにとと謂いふふ桃もも花はなをを樂たのとと為なるる松葉まつはをを

賞おほりと為なりや太子みこ答こたへてのたまたまへく松葉まつばを賞おほ
 せ。為なりと又また問とてのたまたまふ何なに以もつ答こたへてのたまたまふ
 桃もも花はなハ一旦いつたん乃すなはち棠たう物もの松まつ乃すなはち糸いと糸いとハ万まん年ねん乃すなはち貞まこと本もと
 乃すなはち御ご父ちち大おほ小こ汚よご感かん
 ありし抱いだせりせり乃すなはち太子みこ御ご身み太おほ香かぐしく
 ありし世よ乃すなはち常とこの嗅かぐ所ところ乃すなはち珠たま乃すなはち時とき太子みこ御ご父ちちを
 仰おほぎみ看みてのたまたまへく兒こ御ご身み乃すなはち入いる事こと百ひゃく丈ぢょう
 此こゝ殿との乃すなはち登のぼり千せん尺じやくの浪なみ乃すなはち浮うるごと如ごとく大おほと良よき



太子并賀皇后

百濟渡經論



たご危あやうしとのこまふ御父おと圖ましめし橋はしを
 汚く感あ浅かかゞ御厚こう愛あいあせあふこいてあり

諸王子御圖

一日豊あふ日ひ乃御宮中みやちゆう小諸王子おもろうじの御口くち圖まひし叫さけ
 ぶおふこ汚く身みせせるま御父おと皇こう子う圖ましめし橋はしを
 取とり追おせおふこ徳とく王子おうじ皆みな懐なつて逃にげ定か鼠ねおお太子たいし
 ハ御衣ぎぬを脱ぬせぬるまひ獨ひとりり進すすむまふ御父おとこれを
 向むかてのこままましく兄弟きやうだい不和ふあり諸小兒しやうじ等ら報たが

土師連見化人



く口いさひ鬪いさひを今いま答こたへを以もつて海うみを加くわへんと欲ほつはゆ
 小こ白しろ生なまく隠かくる避さる汝なんぢ何なにぞ独ひとり進ま成なりと太子みこ
 合あ掌て一いつ御おん父ちち母はは不た對たい一いつ首くびを低たき啓あきらすの
 まはく踏ふを天あま尔なんぢ立たとも外のれること成なり之の穴あなを
 地ち尔なんぢ穿うがりも隠かくる事ことを得える故ゆゑ尔なんぢ自みづから進すすんで
 答こたへを受う奉こうしんと欲ほつすと御おん父ちち母はは大おほく悦よろこび
 玉たまひ汝なんぢ乃なり岐まが山やま疑うたがはるる今いまのことも何なにぞ
 御おん母ははの淨きよ懷なごみを披ひらき抱かかせぬ尔なんぢ漸しだ身み乃なり



太子後園中



蝦夷寇日本



太子視日羅

常とこきここまま常とこふふああ〜まままくく御ご家け守まも
 あ〜せあふふてていいるる

太子拜賀白皇后

太子御又とこご采さいののまま豊とよ御ご食じき炊ひ屋や姫ひめ尊のみと敏びん達だつ天てん
 皇こう后ご白しろ皇こう后ごおお立たちちああのの日ひ太たい子し御ご妹い母ははおお抱かかきき
 皇こう后ごのの御ご前まへおお侍まへりりああのの妹い母ははおお説とつつ〜のままままくく
 今日けふ群ぐん臣しん糸いと内ない〜の皇こう后ごをを拜まが賀がせんせん其その前まへ
 おお吾われをを膝ひざのの中ちゆう放はなとと則すなはちち大だい臣しん入い不お及よんんでで放はなちち

もろ太子みゆら御身を顧く御衣袴
を調定て徐歩大臣の前ふ立北面して皇
后を再拜しぬ其起伏乃後成人の如し
天皇皇后太子御寵異あぬお妹母太子小
同なり曰く何以小群臣と共おぬしぬ哉
少太子密おのたまはく汝が知はるおぬに
是吾天皇あんと後實業廿二采乃沛時
皇后御即位のり推古天皇とあらせぬお

其時太子儲君として攝政しぬおがゆ急お
未前お君臣乃礼を成ぬおていあり

百濟國渡經論

敏達天皇六年冬十月百濟國より大別王
經論并律師禪師比丘等を將て歸朝する
由を奏しし時太子天皇の玉座の下おゆり
申ひ奏てのたまはく兒情お持來る經論を
見んと欲はと天皇問たまはく何乃由を奏し

のこまハく兒昔傑士小在く衡山の峯小住
一教十身を經て佛道を修めせし佛の
教を垂ゆふハ有ふ此凡無ふ此凡諸善を奉
行し諸惡ハ作奉たられとあり故ふ今百濟
より獻す佛經菩薩の諸論を見と欲
を天皇奇少して又問たまふ汝年六
歳あり独り朕が前より何の日凡傑士
あん何ぞ詐を言ふやと太子奏てのこ

ま小兒の前身意尔慮る可なりと天皇此
折て大尔驚き異少くも小園水の群臣も
大尔舌を鳴し奇異の思ひをなせしと
あり

六所日林宗教生

太子前年此經論を御覽ありて奏せし
まふ月乃八日十四日十五日亦三日九日二十日
是を六所日と凡此日ハ梵天帝釋降りて

國政を見ゆふゆゑにきん 教生を禁ふきんト由よしこき
 仁乃基にのきあり仁にと聖せいとそのころ心こころ近ちかトと天てん白はく王わう
 大尔たいに悦えつひちやく勅てふを天下てんか尔に下くだト此この日ひ教生きやうせい乃なり
 事ことを禁きんふ新しんせんトめゆふと形かたちり

新羅しんら獻けん釋迦じやくぢや三尊さんそん

敏達八年冬十月新羅國しんらこくより佛ぶつ像ざうを
 獻けんむ太子たいし御み父ふ皇子こをして奏そう聞もんたまきト
 めたまめはく西國さいこくの聖人せいじん釋迦じやくぢや牟尼むに佛ぶつ乃なり遺ゆい

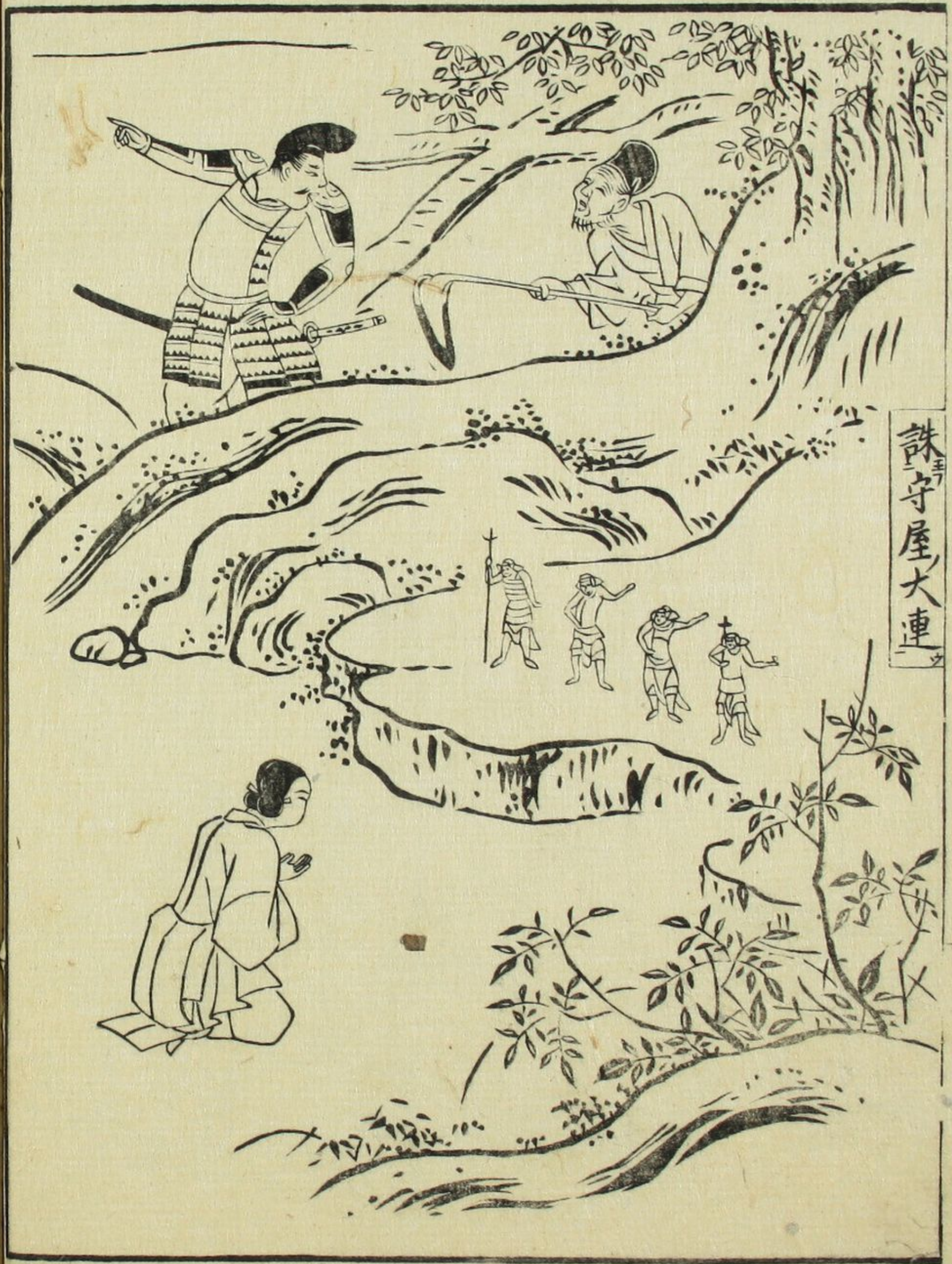
將來しやうらい弥勒みらく石像せきざう



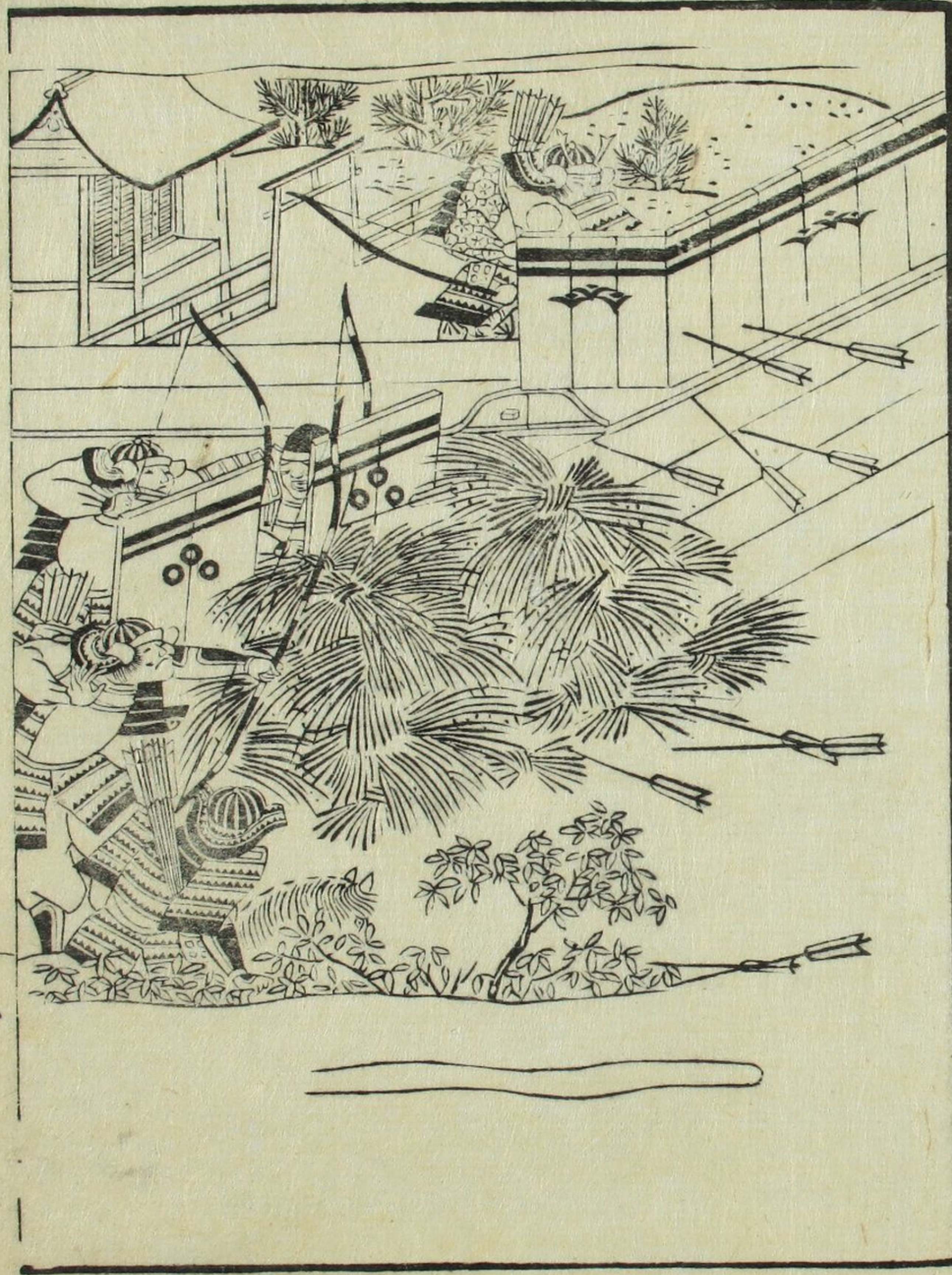
守屋もりや焼やく豊浦ゆへう寺てら

太子相父天皇

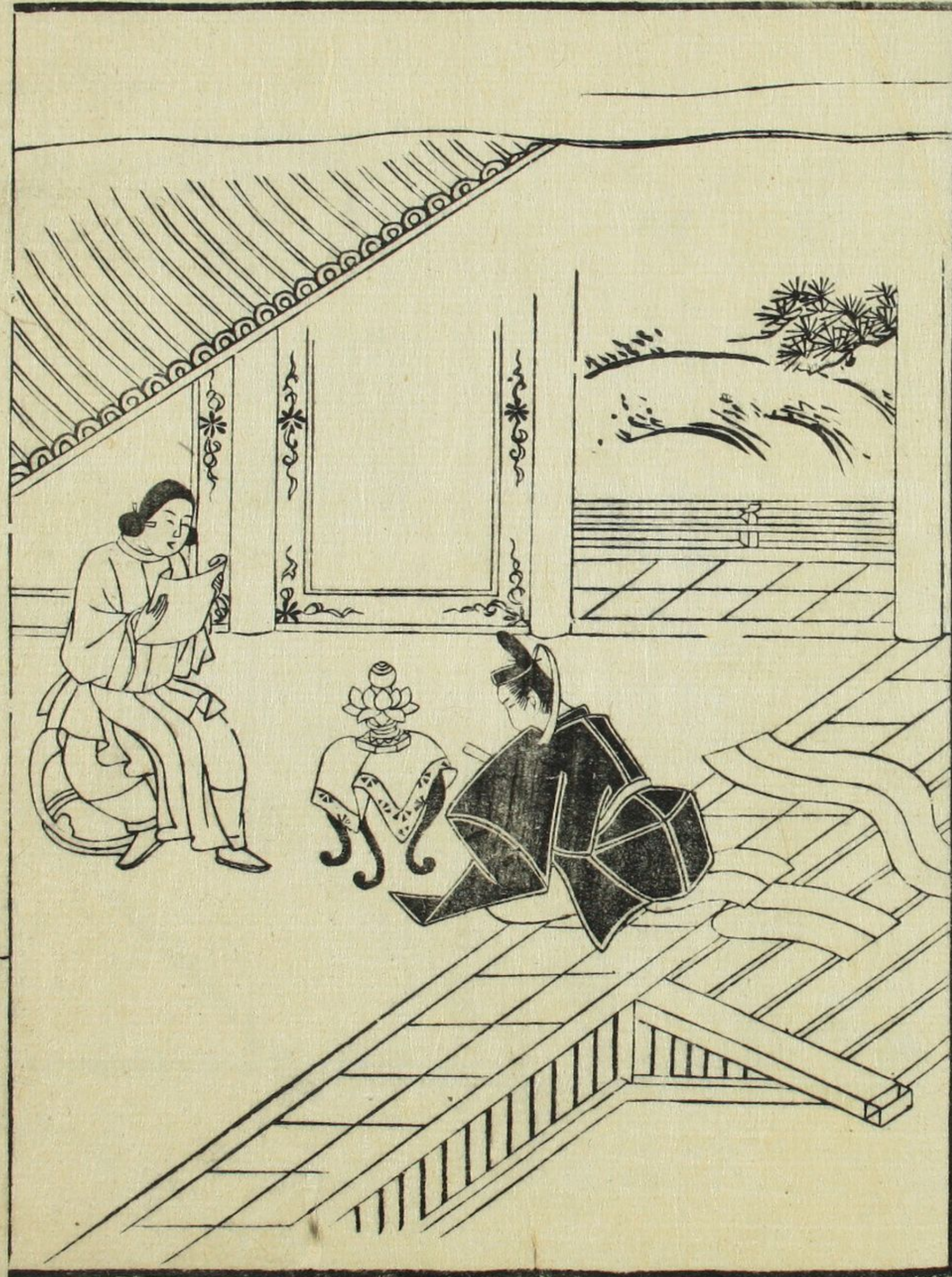




誅守屋大連

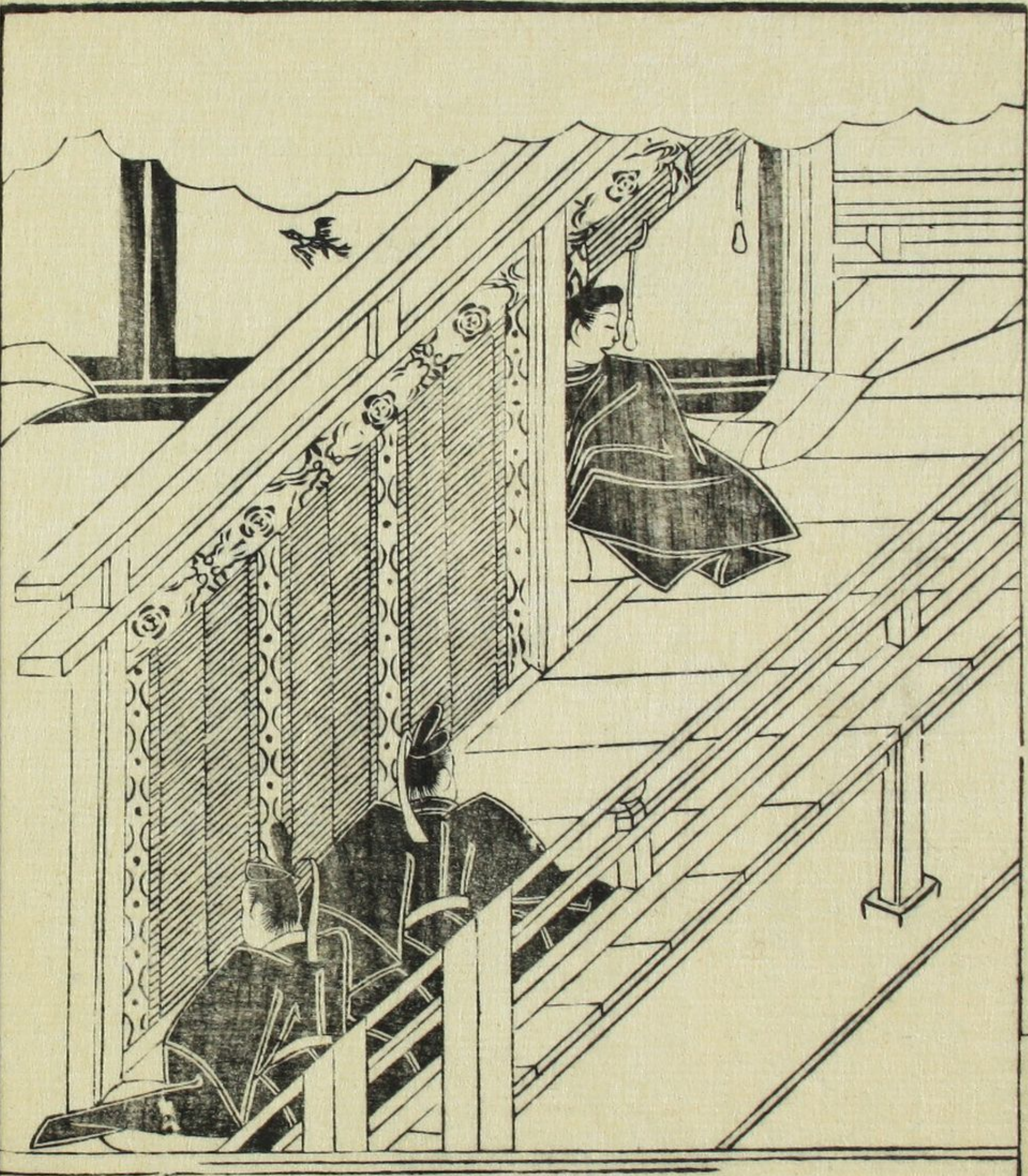






遣使三道

百濟渡佛舍利及僧職人



像ざうなりなり末世まうせの道をみちをを考かんがめめバ禍わざはひをを銷け一いつ禍わざはひを

蒙まうは又また茂さかふふする時ときハ災わざはひを招まねきき寸母すんぼを

編あむむ兒こがが讀よみみ佛ぶつ經きやう尔に其その旨しよ顯あららるるりり沙さをを

くハ佛ぶつ像ざうをを山さん宗しゆ貴き一いつ也や説せつ修しゆの志しををと

天てん皇わう大だい尔に悦よろこびびひひのの事こと安やす置おけけ供く養やう一いつ給たまは

ひ一いつととなりなり
今世像興福寺
東金堂在之云

土師連見化人

敏達九年たみたち夏なつ六月むい人ひとああをを奏そうてて曰いはくく土師つし乃なり

連八鴻つらやうとりし者能歌を唱ふ然しかる小夜よか

く人素ひとつと相和あひして争あひ歌うたの音ね

初はつ常つと小あはれ八鴻一首つらやう乃和歌を詠えいは

我々夜戸野伊羅伽尔伽多わがやど乃古會和こくわい

曾多之伽尔奈能連伊伽那久佐土母そたの

化人返けみえ一

天空離尔澄火あまのそら保師何種曾度豊たにのほ

伽尔都會かると

斯答かて南みなの空尔飛去とびぬ八萬やま異あみ追おひ

尋小住吉乃濱尔到たづね天曉あけをみ海うみ尔入いぬ

と天皇かみ御側みかた尔太子みこ乃の是これ

冬ふゆ灾わざ惑まど星せい乃の天皇かみ驚おどきをましひて

何なに乃の謂いをやと太子みこ答こたへのたままの天あ尔の又また星せい

阿ありの五行ごぎやうをつ主しゅ理り又また色いろ尔の象さう法ぽう歳さい星せい乃の色いろ

青あおくの東あづまをつ主しゅ理り乃の本もと乃の榮さか惑まど星せいハの色いろ赤あか

く南みなをつ主しゅ理り乃の火ひ也なり此この星せい降くだりて人ひとと

ありて童子の間尔あつと抱あそび好このんで謡歌えうたを傳つり
未こ前ぜんの事ことを教しふ必かならず此星このほしをとんと天皇
聞きし然しかし大尔おほし悦よろこばせりあり

蝦夷寇日本

敏達十年壬子二月 蝦夷えぞ數千日本よ此邊境
を寇うかす 其勢そのせい三億さんい六万りくま八千はちせん余よ
先陣せんじん三梯さんしの邊へを來きり 天皇群臣てんかうぐんしんを召めす
征討せいとうの事ことを議ぎしめぬふ 是時このとき太子たうじ側かた尔ありい
ましと群臣ぐんしん乃すなはち議論ぎろんを聞きとぬふ 爾しかれ天皇

太子たうじを召めす汝なんぢが意い如何いか思おもふ哉やと向むかふふ
太子たうじ答こたへてのこまふ小兒せうに何なんを國くに乃すなち大事だいじを
議ぎるふ是こゝれ然しかれ今いま群臣ぐんしん此こゝに議ぎるふハ皆衆みなもろ
生なまを滅めす事ことなり兒こが意い尔なり以もつて為なす先魁師せんかいし
を召めす 蝦夷えぞ乃すなち軍いを大將たいしやうあり 教諭きょうごし 盟ちみいを取とり且かつ重祿ちゆうりくを
賜たまふ彼かが貪おん性をせいを奪うばひ本ほんを落おし放還はうげんし
たまハは可からんと天皇大尔おほし御感おんかんありて即
群臣ぐんしん尔しかれ勅ちやくし 魁師かいし綾糟あやうす等を召めして詔みことし

てねとまはく^{ちんが}你^あ蝦夷^あ者^あむり^あ大足彦天^あ
皇乃世尔救^{ころ}ま^あぎ者^あハ斬^{きり}赦^あま^あぎ者^あ冬放^あ
帰^あ一^あ奴^あ朕^あ今^あ彼^あ前^あ例^あ尔^あ遵^あて^あ元^あ惡^あの^あ者^あを^あ
誅^あま^あんと^あ欲^あす^あと^あ於^あ是^あ綾^あ糟^あ等^あ怖^あ懼^あて^あ盟^あ
て^あ曰^あ臣^あ等^あ蝦夷^あ自^あ今^あ以^あ後^あ子^あく^あ孫^あく^あ清^あ明^あ
乃^あ心^あを^あ用^あく^あ天^あ嗣^あ尔^あ事^あま^あん^あ臣^あ等^あ若^あ盟^あ尔^あ
違^あハ^あ天^あ地^あ諸^あ神^あ及^あ天^あ皇^あの^あ靈^あ臣^あが^あ種^あを^あ絶^あ滅^あ
し^あ多^あくと^あま^あふ^あよ^あり^あて^あ悉^あく^あ許^あし^あ本^あ國^あ不^あ還^あし

終

或^あ抄^あを^あ按^あ尔^あ太^あ子^あ威^あ神^あ力^あを^あ以^あて^あ夷^あ等^あを^あ
服^あせんと^あ思^あ召^あて^あ妹^あ子^あ臣^あと^あ御^あ供^あり^あし^あ
御^あ馬^あ尔^あ召^あ陣^あ雨^あ尔^あ至^あり^あ終^あひ^あて^あ御^あ馬^あ尔^あ鞭^あ
當^あて^あお^あふ^あ忽^あ馬^あ虚^あ空^あ尔^あ昇^あ於^あ誠^あこ^ある^あ
岩^あ山^あの^ああ^あせ^あ蹄^あを^あ以^あ山^あ石^あを^あ踏^あ倒^あし^あ
お^あハ^あ沙^あ石^あ悉^あく^あ石^あ穴^あ不^あ飛^あ揺^あし^あ蝦夷^あ
等^あが^あ陣^あ中^あへ^あ雨^あの^あ如^あく^あ下^あり^あ搏^あ蝦夷^あ等^あ

大尔怒つて山乃峯尔登且盤石を投打
太子御籠めて蹴させぬ小生盤石空
騰り雷電の如く響て遥播列小落又毒
箭を射し御鞭を以投撃たまは
其矢遥尔飛く紀伊の國尔至る太子も鳴
箭失を射させぬ小霹靂止乃如く歌陣
を七匝一上下尔乱轉を魁師四将等れ頭
上を響飛軍賊等皆此神力尔辟易

甲を脱き手と合せ頭を扣き落ると云

太子控後園中

太子春二月乃頃諸童子を率て後園の
中尔控びぬ小時尔諸童子三十六人を太子
控前後左右小侍を御戯尔諸童子各々
思ふ事を一度小音を奏して向をぬ其
時太子ハ榻尔居させぬひくまの長く短
く中事を御首を仰て聞一召一御

返答あらせぬ一句も隨事ありこの如き
 御戲數日あらがれ依童子世中を父母尔
 告ぐ父母奇うして私小或冬難き辭を
 仰りて帝子不認しむる小悉く辨答し
 或時御父微祈し聞ゆ小不稍解難
 事多し世乃人此及事不非此則后妃
 尔御物決りり吾兒ハ殆聖人なりん哉
 中甚御感あらせぬ又或時ハ諸童子と

弓石の御戲或輕く數十丈飛登せり
 或ハ夜走りぬ事雷電乃如し各諸童子
 乃速ふ而尔あらしとあり

太子視日羅

敏達十二年秋七月百濟國乃賢者韋北
 達率日羅と云ふ者其人あり勇あり
 策あり常不身尔先明ありとよめて象朝
 不召則使尔從て難波の館小来朝と云紀ふ

太子日羅が異相あり由を聞きこしめひそく密ひそ尔
 御父ちちに詔まじし難波乃あふきぬの鼓つづみ不行あゆまき鹿布かぶれ
 衣ころもを御めし沛面あんにんを垢よご繩しなを帶かし馬飼むまうひ乃
 兒ちと御肩かたかたを連あて日羅あまを見みゆ時とき尔なり日
 羅あま林やしき尔なり在あ太子みこを指さく曰いく那な乃なり童子こども
 そや是こゝろ神人あまのじんありと人ひとを遣はなし引入ひきいしむ
 太子みこ教おしる去さるる小日羅こひろ履つゆを脱だして走はり
 了ま了り遥とほ尔なり拜まがしまるる太子みこ隱かくれ御衣ぎよひを易か直ち小

日羅あま乃なり館たて尔なり入いり小日羅こひろ地ち尔なり跪ひざまづ合掌あがらし白しろ
 言まく敬禮きやうらい救世きうせい觀世くわんせい音おん大菩薩だいぼつ傳でん燈とう東とう方ほう
 栗散王りくさんおうと云いふ太子みこも折せ磬けいして謝あがり小日
 羅あま身みより光明くわうめいを放はなつ事こと乃なり如ごとく太子みこ
 を御眉みまゆ間まより金光くわうかうを放はなゆ須臾しゆゑあつ川がはを
 止とぬら後のち太子みこれのこまはく子この命いのちハは尽つらん
 惜あむべしし害がいを被かれんとのこまはく小日羅こひろ答こたへ
 曰いく聖人せいじんすら免まむらんは吾われ亦また如何いかんせんと冊

外御法談終夕尔及小人皆解する事を
得る冬十月晦日の夕人あり多日羅を害
さすなり

将来弥勒石像

敏達十三年秋九月弥勒の石像を百濟國
より將來を太子御命ありせむ小体なり以石
像ハ蘇家の大臣乃宅此東尔佛殿を營
みく安置しなむ今ハ元興寺乃金堂小

阿りとり(里)

守屋焼豊浦寺

敏達十四年秋二月太子玉座の下尔侍りぬ時尔
天皇問たまはく我國の基ハ神を以主とん然
尔今大臣驎子異國乃神を祭らんと請て
を如何せん太子奏すのさまふ諸佛世尊
ハ道微妙あり諸神是尔隨て敢て佛
尔違ひぬ今大臣佛法を真せんを請て

是國こく家け乃な福ふくありとのことまふ別わか天てん皇わう
詔みことして道みちく大臣だいじんをたべと許ゆるす然しか尔る同どう

年三月國中ねんさんげつこくちゆう尔に疫えき疾じやく有り死しぶ者もの多おほし

物部ものべ乃なら削せつ大連だいでん中臣ちゆうじん此こ勝海しょうかいの連れん等どう奏そうて

曰いく先天せんてん皇わうより皆みな下くだ尔に至いたり疫えき疾じやく未な息やすこ

き藤ふじ家けの臣おみ等ら佛法ぶつぽうを興おこ祈いのするゆゆり詔みこと

して佛法ぶつぽうを断たんと太子たいし奏そうてのことまふ

二臣ふたおみ未な因果いんぐわの理りをある善ぜんをおもは福ふく至いたり

至いたり惡あくをおせは禍わざはひ來きること是こゝ自然じぜんの理りあり

則すなはち佛教ぶつがくあり今いま乃な疫えき疾じやくも德とくをお除のぞか可べ

あらんと二臣ふたおみ聽きをみ河かのうり寺てら尔に豊とよ申まを寺てら

堂塔だうたつを斫き倒たし火ひを放はなて二ふたを燔や焼あぶ

佛像ぶつざうを難波なんぱ乃なら江え中ちゆう棄す三さん尼に在あり法衣ほふえ

をた集あひひ咎とがをかへ辱はしむ此こゝ日ひ雲ぐもをきふ大おほ

風かぜ多おほし付つ尔に又また國くに民たみ瘡かさをお殺ころす死しぶ者もの

國中こくちゆう尔に亮りやう滿まん乃なら瘡かさをお患うふ者ものの曰いく痛いた

事燒所ヤキが如ごとく此この佛像ブツゾウを燒ヤキる衆ツモよりと
太子タジ御父ミコ亦また謂いてのごとくままはく二臣ニシ破法ハハフの
報ヒひよりて此この瘡カサ疾ヤシをもりて祈ノ請ゾウして
脱ダせしめんと則すなは太子タジ御父ミコと俱とも尔り香カウ爐ロを
敬き奉ほうけ佛ぶつを禮らいして由よしふ夏なつ六月むい獲とふ大臣だいしん
疾やまりあ三さん寢しんを祈いのふんと然しかふ天皇てんわう聞きこ
召め大臣だいしん獨ひとりり祈いのふ事ことを許ゆるして由よしふことをしり
佛ぶつ法ぽう秘ひく興かこまりこなること



恭導
持奉

